

砂原キリシタン墓碑群

この2基の墓碑は、松に覆われた丘の中腹に、真正面に海を見下ろして立っています。どちらも形状は平置きの平板ですが、異なる石材が使われています。風化による損壊が激しい方は玄武岩質水底火砕岩で作られています。比較的保存状態が良い方は安山岩で作られており、前面には十字の各先端が三位一体を表す三枚の花弁で飾られた「花十字」が刻まれています。（この墓石が載っている石の土台は元の墓碑の一部ではありません。）どちらの墓碑にも名前や日付は刻まれていませんが、これらは17世紀初期につくられたものと推定されています。おそらくキリシタンたちがクリスマスに牛肉を食べていたことにちなんで、地元の人たちはかつてこれらの墓碑を「牛の墓」あるいは「牛の神」と呼んでいました。

日本のキリシタン墓碑について

日本におけるキリスト教の初期につくられたキリシタン墓碑として確認されている192基のうち、146基が長崎県にあり、その全てが17世紀初期のものです。（1581年につくられた日本で最も古いキリシタン墓碑は、大阪市に近い四條畷市にあります。）長崎地域のキリシタン墓碑は、当時のヨーロッパの墓のデザインを反映し、平板型・切妻型・半円柱型・角柱型のいずれかに整形した石を平置きにしたものがほとんどです。仏教の墓石には漢字数文字からなる故人の死後の名前（戒名）が刻まれるのに対し、キリスト教の墓石には、多くの場合、西洋式の洗礼名が記されます。花十字や横棒が二本の形十字、イエス・キリストの名前の略語である「HIS」という3文字で飾られていることもあります。石の墓標は高級品だったため、墓碑で弔われているのは金銭と権力に恵まれた人々だったと考えて良いでしょう。キリスト教が禁止された後、このような平置き of 墓石の中には、くり抜かれて手を洗うための手水鉢にされたり、石垣に組み込まれたり、地中に埋められたりして、仏教の建造物の一部に転用されたものもありました。長崎のキリシタン墓碑は、ほとんどが当初置かれた場所には残っていないものの、もとの設置場所の付近で発見されることがよくあります。